

第4章 江戸時代

江戸時代に「鹿籠」を治めたのは、喜入氏です。

喜入氏は、島津家9代当主忠国の七男忠弘を祖としていますが、鹿籠（枕崎）を治めるようになるのは、喜入家5代の季久からです。以下、次のようになります。

季久	—	久道	—	忠統	—	忠高	—	忠長	—	久亮	—	久致	—	久峯	—
久茂	—	久福	—	久量	—	久欽	—	久通	—	久高	—	久博			

島津家は、家臣の家格を、上から順に、一門家・二所持いっしょもち・二所持格いっしょもち・寄合いっしょもち・寄合並いっしょもち・小番いっしょもち・新番いっしょもち（以下略）としていました。

一門家は、最も重い家格で、いずれも給地高1万石以上で、島津本家の二男家、または準二男家です。加治木家・垂水家・重富家・今和泉家の4家です。

二所持いっしょもち・二所持格は、一門家に次ぎ、島津氏の三男以下または由緒ある家柄で、私有地を支配していました。鹿籠の領主、喜入家は、二所持いっしょもちの家柄です。

下写真は、喜入家累代の墓地です。

島津一門である喜入家が、「喜入」の姓を名乗ったのは、1558年に所領の地をもって称号と定めることになったからです。その当時、5代季久は喜入を領していた（後に鹿籠に移る）ので、喜入氏となったのです。

鹿籠は、鹿籠四十町とされ、2000石の領地でした。元禄年間（1700年頃）に10代久亮が270余石を加増され、2200余石の領地になっています。

江戸初期の人口は1000人ぐらいといわれますが、1767年の『鹿籠名数記』によれば、3000余石となり、人口は8156人です。幕末の頃には、4206石余となっています。なお、人口については、1826年に1万248人になっています。

日本地図で有名な伊能忠敬は、1810年に枕崎を訪れています。その時の九州東海辺沿海村「順」には、家数1187とあります。本村344・枕崎村156・板敷83・小湊123・木原52・白沢津浦96、ほかに喜入氏家来160軒となっています。



鹿籠領主である喜入家の中で、特に名君とされるのが、10代久亮ひさあきです。

久亮は、島津家当主島津光久の9男として、1658年、江戸で生まれ、江戸で育ちました。9代の忠長に跡継ぎがいなかったため、1663年、6歳で、喜入家を継ぎました。29歳で国老（薩摩での家老）となり、以後20年間在職します。鹿児島
の荒田に屋敷があり、ふだんは荒田で生活していました。1706年に隠居してからは、鹿籠に移り住み、1722年、65歳で亡くなっています。

久亮は、領内の開拓に心を傾け、西鹿籠の開墾、牛野新田や木原新田の開田、別府の開拓、田布川（右写真は田の神様）の給地などに努め、鹿籠（枕崎）発展の基礎を築いた人です。大塚地区に井ぜきを設け、用水路を整備して、今の立神小学校西方から田畑地区や木原地区の開田をしたり、花渡川及び中瀬川流域の開田・別府の開田をしたりしました。

Ⅱ部で詳しく述べる枕崎のカツオ漁にも大きく関係します。

また、1万句にも及ぶ連歌集「万句賀親乾ばんくがしんけん」（左写真）も残しています。



連歌とは、2人以上で和歌の上の句と下の句を詠み続けていく形式の歌です。最初の5000句は山本度好と詠んでいます。残りの5000句は1人で詠んでいます。91・5m 裏表)の長さです。

この頃、鹿籠金山が発見されています。鹿籠の郷土有川夢宅(次頁右写真は有川の墓)が17世紀末に発見したと伝えられています。掘り始めたのは、1683年です。当初は、領主の喜入久亮が事業を経営しましたが、後に藩の直営とし、その代償として、加世田郷の中山地区を鹿籠郷に編入しました。

幕府の奨励もあり、18世紀初期に最盛期を迎えます。幕府への報告書には、年産金額は15〜16貫(約60kg)、働く人は300余人とあります。36か月も続けて、月に36貫ずつ生産したこともありました。



明治になって、個人のものになりますが、昭和18年に金鉱業整備令があり、閉山しました。

1666年には、四本六兵衛が自分の居宅（今の国見病院の場所）写真）を喜入久亮に贈り、久亮はこれを「御仮屋」にしています。領主の領地入りや藩主など来賓の接待、さらに幕府の役人である「浦廻上使」の宿舎や藩主の宿泊にも使われました。

薩摩藩の支配体制として、外城制とじょうによる郷士制度と、農政としての門割かどわり制度があります。

外城制は、鶴丸城の他に、領内を113の区画に割ったもの（普通には郷という）です。郷士とは、その郷に住んでいた武士を指します。郷士は、農村居住を原則としながら百姓ではなく、しかも武士的身分を与えられていた」（『日本史大事典』）のです。

門割制度は、「二村を数方限ほうぎりに分け名主が頭となり、方限はまたいくつかの門（百姓の組）に分けて、名頭みようず（乙名おとな）が数家部の名子らの頭となっている生産共同体」（『日本史大事典』）です。各門ごとに年貢や賦役が決められていました。

鹿籠の門数は、『鹿籠名数記』によれば、84門で、平均で1門が20石余だったとされます。



なお、明治になって、全員が名字を名乗るようになって、ほとんどの人は自分のいた門名を名字にしています。

薩摩藩の外城には、藩直轄の地頭地と一所持いっしょもちの私領（二所地）がありました。鹿籠は、喜入氏世襲の私領です。喜入家の当主は、ふだんは鹿児島島の荒田にいましたが、鹿籠を治める政治は、桜之城跡（今の桜山小の場所）に役所を設けました。おおむね4人の役人がいて、その配下に書役（記録係）数人がいました。

鹿籠の武士は、喜入家の家来、いわゆる、家中士で、57家がありました。家中士を3組（サーダ―をくみがしら与頭くみがしらと言います）に分け、領内の担当地域を、それぞれ「東鹿籠・枕崎・別府」「西鹿籠の内、坊街道より南」「坊街道より北」としていました。

この地域分けをみても、今の桜山地区が当時の中心だったことがわかりますね。

また、園見岳と宗前岳の裾野に、「鹿籠牧苑かしぼくえん」という喜入氏の牧場がありました。広さは30町歩（約30ha）で、1767年には領主放牧馬58頭、家中放牧馬130頭がいました。

薩摩の画家、馬場伊蔵（1854年没）の「枕崎風景画」次ページ右上写真）があります。坊

津の耳取峠から枕崎の海岸線を描いたもので、当時の様子を知ることができる貴重なものです。

なお、右下写真は現在の耳取峠からのものです。

幕末には、外国船が近海に出現する傾向が出てきた。そこで、1844年には、薩摩藩は、枕崎の瀬崎に、台場（左写真は台場公園）を築いて、大砲8門を据え付け、鹿籠の武士に命じて警備にあたらせています。また、

枕崎の異国船遠見番所（今の岩戸です）は、それ以前に建てられ、一時廃止されていましたが、1798年には再開しています。駆け付け馬」という制度を設け、外国船が通行する度に、家臣は枕崎に集まり、鹿児島に急報することになっていました。

1851年10月には、藩主の島津斉なりあきら彬が、鹿籠の松之尾浜で、久志・秋目・坊泊、鹿籠、知覧、穎娃、指宿、今和泉の各郷の教練を検閲しました。

この時期の海難事故として、1850年、暴風のため枕崎の漁船一艘が種子島近海で遭難し、14



名が死亡したとの記録（『種子島家譜』）があります。

なお、1862年、赦免となった西郷隆盛が奄美大島から帰る時の迎えの船は、枕崎の船でした。途中何回も時化に遭ったため、枕崎に寄港し、枕崎で数日を過ごしています。

この頃、薩摩藩では、鹿籠領主喜入久高を家老に登用し、公武合体への政策転換を図っていました。それらの事情を西郷に話して召還するには、久高の治下にある枕崎の大船（いさば）を使用するのがよいと考えられたものと思われます。